**こころ**

**室蘭草枕高等学校　三年　夏目　漱石**

　二人はめいめいの部屋に引き取ったぎり顔を合わせませんでした。Ｋの静かなことは朝と同じでした。私もじっと考え込んでいました。

　私は当然自分の心をＫに打ち明けるべきはずだと思いました。しかしそれにはもう時機が後れてしまったという気も起こりました。なぜさっきＫの言葉を遮って、こっちから逆襲しなかったのか、そこが非常な手ぬかりのように見えてきました。せめてＫの後に続いて、自分は自分の思うとおりをその場で話してしまったら、まだよかったろうにとも考えました。Ｋの自白に一段落がついた今となって、こっちからまた同じことを切り出すのは、どう思案しても変でした。私はこの不自然に打ち勝つ方法を知らなかったのです。私の頭は悔恨に揺られてぐらぐらしました。

タイトル、高校名、学年、氏名（姓と名の間は一マス開ける）はＭＳゴシック、文末揃えの太字で。

道立高校の「北海道」は省略でお願いします。

　私はＫが再び仕切りの襖を開けて向こうから突進してきてくれればいいと思いました。私に言わせれば、さっきはまるで不意撃ちに会ったも同じでした。私にはＫに応ずる準備も何もなかったのです。私は午前に失ったものを、今度は取り戻そうという下心を持っていました。それで時々目を上げて、襖を眺めました。しかしその襖はいつまでたっても開きません。そうしてＫは永久に静かなのです。

ヘッダーに部門を記載。部門毎にファイルを分けてください。

　そのうち私の頭は段々この静かさにかき乱されるようになってきました。Ｋは今襖の向こうで何を考えているだろうと思うと、それが気になってたまらないのです。ふだんもこんなふうにお互いが仕切り一枚を間に置いて黙り合っている場合は始終あったのですが、私はＫが静かであればあるほど、彼の存在を忘れるのが普通の状態だったのですから、その時の私はよほど調子が狂っていたものと見なければなりません。それでいて私はこっちから進んで襖を開けることができなかったのです。いったん言いそびれた私は、また向こうからはたらきかけられる時機を待つよりほかにしかたがなかったのです。

小説、詩の作品については、途中で終わった場合、次の段の１行目から次作品のタイトルを入れてください。

**ぼろぼろな駝鳥**

**室蘭昴高等学校　三年　高村　光太郎**

何が面白くて駝鳥を飼うのだ。

動物園の四｜坪半のぬかるみの中では、

脚が大股過ぎるぢゃないか。

頚があんまり長過ぎるぢゃないか。

雪の降る国にこれでは羽がぼろぼろ過ぎるぢ

　ゃないか。

腹がへるから堅パンも喰ふだらうが、

駝鳥の眼は遠くばかり見てゐるぢゃないか。

身も世もない様に燃えてゐるぢゃないか。

瑠璃色の風が今にも吹いて来るのを待ちかま

　へてゐるぢゃないか。

あの小さな素朴な頭が無辺大の夢で逆まいて

　ゐるぢゃないか。

これはもう駝鳥ぢゃないぢゃないか。

人間よ、

もう止せ、こんな事は。

詩については、一行が二十字を超える場合、二行目以降は行頭を一文字下げて書いてください。

**室蘭木曜高等学校　二年　高浜　虚子**

一様に筍さげし土産かな

いつ死ぬる金魚と知らず美しき

顔かくし行過ぎたりし日傘かな

行水の女にほれる烏かな

京伝も一九も居るや夕涼み

早乙女の重なり下りし植田かな

静かさは筧の清水音たてて

セルを着て病ありとも見えぬかな

底の石ほと動き湧く清水かな

月青くかかる極暑の夜の町

**室蘭木曜高等学校　二年　河東　碧梧桐**

俳句は１行空けで作品を記載してください。

初日さす朱雀通りの静さよ

薮入のさびしく戻る小道かな

元日や寺にはひれば物淋し

上京や万歳はいる寺の門

元日の袴脱ぎ捨て遊びけり

蓬莱や海老かさ高に歯朶隠れ

ほの暗き忍び姿や嫁が君

賣初や多分に切つて尺の物

屠蘇鱈汁数の子の御列かな

四ツ手毬上手にこそはゆりにけれ